

付近の見どころ場所

名称	場所	見どころ解説	名称	場所	見どころ解説
古沢遺跡	古沢	この遺跡は、旧石器時代から奈良・平安時代まで人々の生活が営まれた場所と言われている。6回にわたる調査で、縄文時代に属する多くの遺構と、奈良・平安時代の竪穴住居跡6軒や製鉄に関する遺構などが発見された。 遺構からは、縄文時代後期(約3,500年前)の 食糧貯蔵用として使われていた直径1.5mほどの穴で炭化したドングリやトチの実、また中期から晩期にかけて、祭祀を行ったと推定される施設のある大型の袋状の穴、縄文土器を10個分も埋めた穴、石刀や笛と考えられる土版を埋納した墓穴など、いろいろな用途の穴が発見された。 遺物では、縄文土器や石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹み石、石皿など狩猟・漁ろう・植物加工の道具、土偶、土版、三角とう型土製品、石棒、石冠などまつりの道具が数多く出土した。これらの事から古沢遺跡に住んだ人々は、呉羽丘陵の豊かな自然の恵みを受けながら長い間生活を続けたことがわかる。	境野新及び向野池遺跡	境野新	富山西インターチェンジ及び周辺の企業団地周辺に境野新遺跡及び向野池遺跡がある。 調査は昭和47年度の圃場整備に先立って行われた調査から、平成12年以降の富山西インターチェンジ設置工事に伴う調査まで数次にわたって行われた。 向野池遺跡は、かつてのかんがい用溜め池「向野池」の北東に位置し、旧石器・弥生・平安時代の集落・生産遺跡である。 最初の昭和47年調査では、平安時代(約1100から1000年前)の土師器焼成坑4基、井戸3基、大型建物を含む掘立柱建物15棟以上、製炭土坑などが見つかり、甕や鍋などの日常容器とともに、瓦塔(仏具)が出土した。 その後平成12年度調査では、土師器焼成坑4基、井戸2基、掘立柱建物4棟以上などを発見した。瓦塔とは、寺院の五重塔などを部分ごとに焼いて組み合わせた、高さ1~2mほどの瓦の塔で、仏教的色彩の強い遺物である。奈良~平安時代に多く作られ、集落の小さな祠堂などに納められたと推定されている。 平成18年度調査では、平安時代の掘立柱建物8棟、井戸1基、鍛冶炉1基、製炭土坑21基、弥生時代の竪穴住居2棟、縄文時代の竪穴住居1棟、土坑などが発見された。集落の建物の配置は軸方向がほぼ同一で、計画的に配置されていた。そして柱穴からは、多量の鉄鏃、ふいごの羽口、鍛造剥片、製炭土坑からは、炭化物が出土した。また旧石器時代の尖頭器・凝灰岩質の剥片2点・安山岩の剥片、縄文時代の打製石斧も出土した。 境野新遺跡は、昭和47年の発掘調査で古墳時代の竪穴住居が見つかり、現在遺跡公園として整備されている。平成12年調査では、南北に横切る大小の溝や、穴を検出した。遺構の時期は特定されていないが、溝の中からナイフ形石器・剥片(旧石器時代後期)・縄文土器・石鏃(縄文時代晩期)、須恵器(奈良から平安時代)、越中瀬戸焼・伊万里焼の陶磁器片(江戸時代)が出土した。また石器を作るための原石などが発見されており、この地で石器が製作され、生活を営んでいたものと想定されている。また、両遺跡では西と東の旧石器技法で製作された石器が見つかり、当地が約15,000年も昔から東西旧石器文化の交流地域であったとうかがえる。
朝日の滝	朝日	県道富山小杉線が呉羽丘陵を横断するトンネルの入り口、北側に朝日の滝がある。 この滝は、立山の御来光が当たる霊験あらたかな場所にあり、難病であるハンセン病を治したと云われ、全国から滝に打たれに来る者が大勢あり、江戸時代に茶店や旅館もあって大変賑わったところである。境内にはお堂があり阿彌陀如来、薬師如来、不動明王、寶頭蘆者の4体が祀られ、また大きな櫻の木が生い茂っている。	板谷南遺跡	板谷	板谷集落の周辺に広がる水田中央部に板谷南遺跡がある。 圃場整備に先立ち平成10年から行われた発掘調査で白鳳時代末から奈良時代前半(約1300年前)にかけての須恵器の窯跡1基と、須恵器と瓦を焼いた窯跡(瓦陶兼業窯)1基が発見された。また、建物の柱穴跡、粘土を掘り出した採掘穴、井戸跡が発見されたことから、遺跡は粘土を採掘し、窯の築造から、土器や瓦を焼成するまで一連の作業を行う生産工房であったと思われる。 出土した瓦類は、数千点(軒丸瓦・丸瓦・平瓦)におよび、中でも『単弁八葉蓮華文軒丸瓦』が130点以上で、これだけ大量の軒丸瓦が発見された例は、全国的に数少ないものである。 また、軒丸瓦は、同じ範(木版に文様を刻んだ型)を用いて作っており、短い間に集中して生産していたものと思われる。 一方、『平瓦』は、出土した数がわずかだが、凸面を縄巻いた板でたたいて形づくる「桶巻作り」という技法で作られていた。 その他、「対葉花文の透彫り」木製品(東大寺が造営された頃の仏像台座などの文様)と「鐘鈴」(鐘状の銅製品)が発見された。 これらは、古代仏教に関連する遺物であること、また出土した瓦の特徴から、この地の有力な豪族が都から瓦工人を招き瓦製造して、近くの寺院や官衙(役所)へ供給していたと思われる。
友坂一重不整合地層	婦中友坂	富山大学付属病院の南側道路の崖面に1000万年~100万年前までの地殻変動による二重の不整合面が出ている。1000万年前の海底火山の爆発により出来た不整合面(軽石質、凝灰岩など)の上に砂の層、礫層などが重なっている。これは海底であった地層が隆起し、そこに河川が流れ込み砂や石などを堆積させたもので古い神通川の跡とされ、その後、さらに隆起し神通川は、呉羽丘陵の東面へ移動した。このような地層を見ることは大変珍しく、県指定の天然記念物となっている。	杉谷	杉谷	富山大学付属病院へ入る手前で北陸自動車道のわきに小さな祠が建ち霊水が湧いている。 呉羽山観光協会の案内板によると、「昔、この地に住む民が大和王朝に攻められたとき一族の皇子、建御名方命諏訪神が明神池間近に神籬(ひもろぎ)を設け一族の子孫繁栄を願う白蛇に化して池底に姿を消した。その時、神籬の岩が割れ湧水が溢れ出た。人々は、恐れ恭順して神が宿る岩として神聖に祭った。」とされ、これが若宮大明神である。 また富山藩時代には前田利次が杉谷山で鷹狩、矢の訓練に来たおり飲料し城に持ち帰ったとされ、このため住民に使用を禁じた事から「殿様清水」とも呼ばれている。 この霊水は今も変わることなく流れ出て、力の源、百薬の水、霊水として親しまれている。
杉谷の霊水	杉谷	富山大学付属病院へ入る手前で北陸自動車道のわきに小さな祠が建ち霊水が湧いている。 呉羽山観光協会の案内板によると、「昔、この地に住む民が大和王朝に攻められたとき一族の皇子、建御名方命諏訪神が明神池間近に神籬(ひもろぎ)を設け一族の子孫繁栄を願う白蛇に化して池底に姿を消した。その時、神籬の岩が割れ湧水が溢れ出た。人々は、恐れ恭順して神が宿る岩として神聖に祭った。」とされ、これが若宮大明神である。 また富山藩時代には前田利次が杉谷山で鷹狩、矢の訓練に来たおり飲料し城に持ち帰ったとされ、このため住民に使用を禁じた事から「殿様清水」とも呼ばれている。 この霊水は今も変わることなく流れ出て、力の源、百薬の水、霊水として親しまれている。	板谷南遺跡	板谷	板谷集落の周辺に広がる水田中央部に板谷南遺跡がある。 圃場整備に先立ち平成10年から行われた発掘調査で白鳳時代末から奈良時代前半(約1300年前)にかけての須恵器の窯跡1基と、須恵器と瓦を焼いた窯跡(瓦陶兼業窯)1基が発見された。また、建物の柱穴跡、粘土を掘り出した採掘穴、井戸跡が発見されたことから、遺跡は粘土を採掘し、窯の築造から、土器や瓦を焼成するまで一連の作業を行う生産工房であったと思われる。 出土した瓦類は、数千点(軒丸瓦・丸瓦・平瓦)におよび、中でも『単弁八葉蓮華文軒丸瓦』が130点以上で、これだけ大量の軒丸瓦が発見された例は、全国的に数少ないものである。 また、軒丸瓦は、同じ範(木版に文様を刻んだ型)を用いて作っており、短い間に集中して生産していたものと思われる。 一方、『平瓦』は、出土した数がわずかだが、凸面を縄巻いた板でたたいて形づくる「桶巻作り」という技法で作られていた。 その他、「対葉花文の透彫り」木製品(東大寺が造営された頃の仏像台座などの文様)と「鐘鈴」(鐘状の銅製品)が発見された。 これらは、古代仏教に関連する遺物であること、また出土した瓦の特徴から、この地の有力な豪族が都から瓦工人を招き瓦製造して、近くの寺院や官衙(役所)へ供給していたと思われる。



現地の案内板



大きなケヤキが覆い繁る朝日の滝



現地の案内看板の写真より



杉谷の霊水



出土した瓦塔(富山市HPより)



出土した軒丸瓦(富山市HPより)

古墳に魅せられて(ファミリーパーク「悠久の森」関連事業)

呉羽丘陵(古沢周辺)歩行会

「旧北陸街道を歩く」実行委員会

第6回歴史探訪・平成25年10月19日(土)

日程とコースタイム

8:00	……………	受付(富山の水道水ボトル配布)
8:45	……………	班編成
9:00	……………	開会式
9:30	……………	スタート(第1班)



(説明箇所と時間帯)

①安田城跡	10:00~10:35
②根本山中堂寺	10:10~10:45
③友坂熊野神社	10:35~11:10
④杉谷古墳群(4号墳)	10:50~11:25
⑤古沢塚山古墳	11:35~12:10
⑥古沢神社と古沢用水	11:45~12:20

12:10~12:45 …… 到着予定時間

12:00~13:00 …… 豚汁サービス

ファミリーパークにてフリータイム

14:00 …… (本部解散)

(私の番号) 第 班 番

呉羽丘陵(古沢地区周辺) 歩行コースと見どころ

No名称	場所	見どころ解説
呉羽丘陵		富山県の中央部で富山平野を二分するように南西から北東方向に約8Km走り、北が百塚で平野部に突入り、南が池多で飛騨山系と繋がり、城山(145.3m)、呉羽山(71.3m)、ハヶ山(35.0m)の三つのピークを持つ。呉羽丘陵を境にして呉西、呉東と云う呼び名が残るように方言や風俗など文化の面で異なる事が指摘されている。丘陵や裾野には数多くの遺跡が分布しており中でも、境野新遺跡(旧石器時代のナイフ形剥片が出土)杉谷古墳群(四隅突出墳、弥生、古墳時代で山陰地域との関連) 蜆が森貝塚、小竹貝塚などがあり古くから人が住んでいたことが明らかになっている。また現存する神社仏閣が多いことから市民の生活との関わりが強く、丘陵全体の大部分が都市計画公園として保全されている。

No名称	場所	見どころ解説
富山市ファミリーパーク	古沢	開園30周年(昭和60年4月28日、開園)を間近に控えるファミリーパークは、郷土の動植物の様々な知識を普及するため、富山および日本の動物たちを中心に生態展示し、さらにホクリクサンショウオ、ホテルなどの自然環境の調査と保全をしながら世界的な視野に立ってライチョウの保存事業にも参加して来ている。他方では呉羽丘陵の里山を守るため「未来に呉羽の里山を残していこう」と地元自治振興会・小中学校・団体などと「悠久の森実行委員会」を組織し里山に関わるイベントや体験ツアー等を実施しながら「新しい里山」をつくり出すための活動もしている。今後も、「動物」「里山」「地域」をテーマに、様々な事業を進め、「人も森も元気になる新しい里山づくり」を目指している。



熊野神社参道

No名称	場所	見どころ解説
安田城跡	安田	この城は、井田川左岸の扇状地に立地する平城で、堀を含め東西150m、南北240mの規模を誇る。「本能寺の変」以降、天下統一を目指す豊臣秀吉が織田の家臣であった佐々成政を討つため天正13年(1585)10万の大軍で越中攻めをした。これに先立ち先鋒隊の前田利家が白鳥城の支城として安田城と大谷城を造ったとされる。成政降伏後も成政監視のため前田家の岡崎一吉や平野三郎左衛門などが居住し前線拠点として使われたが、前田利長が富山城主になると役目も薄れ慶長年間に廃城された。富山県を代表する戦国時代の平城として昭和56年、国の史跡指定を受けた。その後の調査では、油を燃やして明りをとる灯明皿、瀬戸美濃の天目茶碗、中国製の染付皿などの陶磁器や短刀、銅銭などが出土した。これを経て平成2年から3年間をかけ濠や土塁が復元され、その後、資料館も建設された。地元では、平成5年より安田城跡を会場としてイベント「月見の宴」が毎年開催されている。



安田城跡の空中写真(富山市埋蔵文化センターHPより)

No名称	場所	見どころ解説
根本山中堂寺	安田	浄土真宗大谷派寺院。中堂寺古文書寺歴によると、文治年中(1185~90)、木曾義仲に仕えていた五十嵐民部少輔定綱が越前足田の地で亡くなった。文正年中(1466~67)になり、定綱の末裔で九代孫、助太夫乗清が越前城主朝倉敏景に仕えたあと、比叡山にて勤学し、定綱菩提のため足田で天台宗中堂坊を営んだことにはじまる。文明5年(1473)、乗清が吉崎御坊の蓮如上人に帰依し、天台宗から浄土真宗に改宗して乗法と称した。永禄5年(1562)、神保長職が金屋村で上杉勢と戦って敗れる。神保方についた二代乗貞(室は長職の娘)は足田に逃れたが、やがて越中倶利伽羅辺りに移り、のちに安田村に一字を建てる。中堂寺は神保長職の準菩提寺となる。天正元年(1573)、三代浄法の時、東西分派の際にしばらく新川郡舟倉村に住む。天正18年(1590)、安田城主岡崎帯刀左衛門尉から小泉村で二町歩の地を受ける。文禄2年(1593)、本願寺分裂の際、教如についたため弾圧され舟倉に難を逃れる。慶長19年(1614)、舟倉の地で火災に遭う。加賀藩二代藩主前田利長から安田村に1252歩を拝領して当地へ移り(この間に一時金屋村に居住)現在に至る。同寺には、南北朝時代の越中守護桃井直常にまつわる開基伝承もある。富山藩主二代正甫公、八代利謙公、九代利幹公からの拝領品あり。中堂寺は城への通行の際、助作御門を乗物での許可が認められていた。寺宝として富山城本丸御殿(あるいは千歳御殿とも)から移された欄間がある。扇子模様の欄間は富山城の数少ない貴重な遺物である。ほかに、秀吉から「天下第一」の称号を許されていた辻と次郎の雪見燈籠(天正元年(1573)作)など多数あり。



根本山中堂寺正面

No名称	場所	見どころ解説
熊野神社	婦中友坂	富山大学付属病院裏の県道を下ると熊野神社があり、延喜式内社の論社として取り上げられている古くからの神社である。式内社の多くは、古墳時代からの有力な豪族が信仰していた神社を元に平安時代の朝廷が認定した神社で、また熊野神社の信仰の系統には、出雲の熊野大社を元にするものと、紀州の熊野三社(本宮、速玉社、那智社)を元とする二つがある。当社は、創建が大正2年(702)とされ出雲大社の系統と言われている。友坂は古代より射水平野から呉羽丘陵の峠を越えて富山平野に抜ける交通の要衝で、杉谷古墳群の4号墳もあることから出雲と関係の深い豪族が、この地域を支配していたことが考えられる。杉谷古墳群と併せて出雲とのつながりの強い事がうなずける。
杉谷古墳群・杉谷遺跡群	杉谷	富山大学の医薬学部、病院などがある敷地内に11基の古墳と遺跡群がある。これらの古墳、遺跡は、昭和49年(1974)北陸自動車道の開通や富山大学医学部(当時、富山医科薬科大学)の開設にあたり調査、発見されたものである。古墳群は、弥生時代終末期から古墳時代前期(約1,800~1,700年前)に造営された墓地で様々な形の墳墓が混在している。なかでも4号墳は、四隅突出型古墳(一辺が25m、突出部12m)と云う出雲を中心に造営されたもので、弥生時代後期に日本海沿岸に広がったとされる。周辺には六治古



熊野神社参道

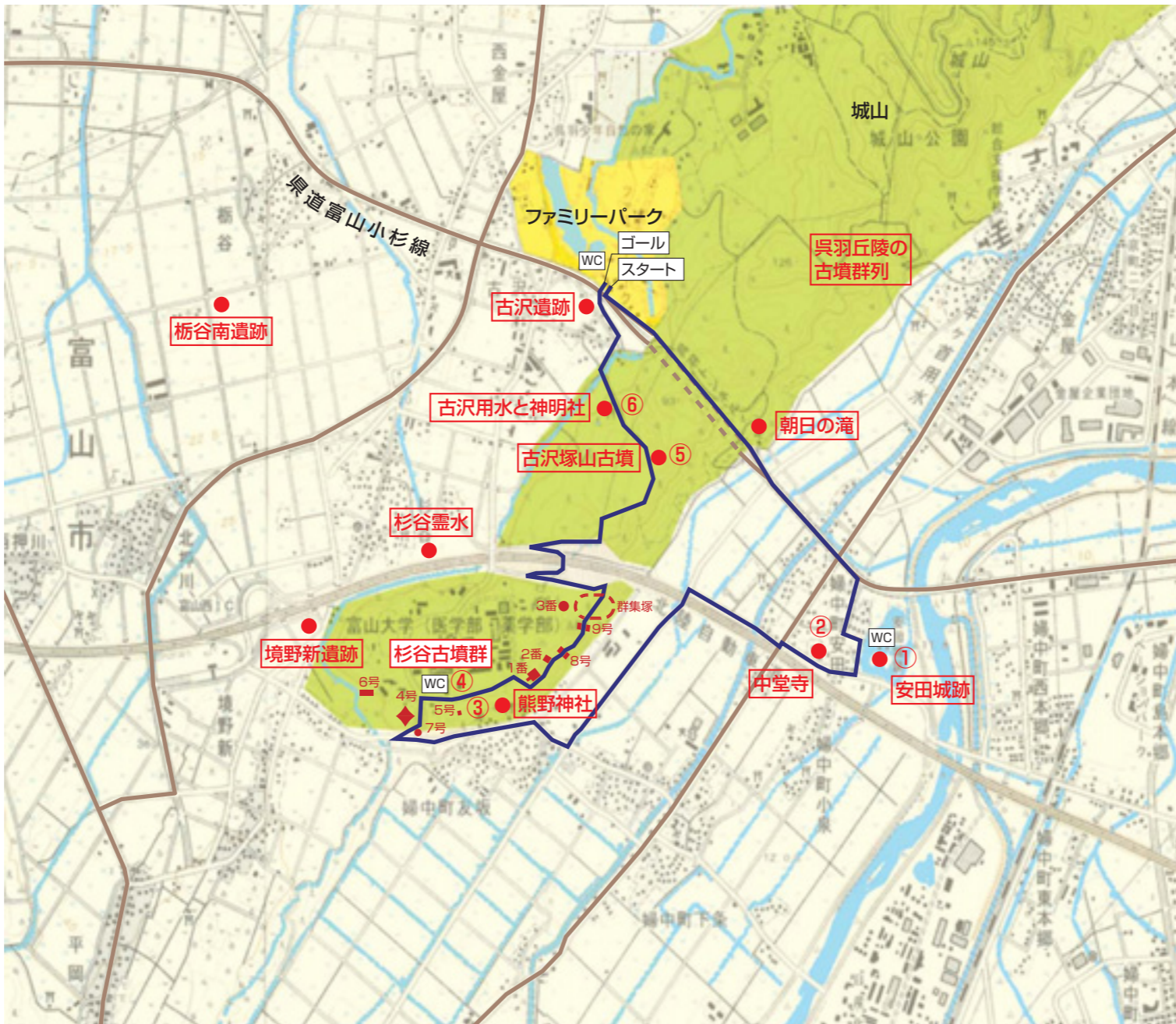
No名称	場所	見どころ解説
古沢塚山古墳	古沢	塚墳墓や富崎墳墓群1~3号墓など、合わせて7基の四隅突出型古墳があり古事記や出雲風土記に出てくる出雲と越の国の交流がうかがえる。杉谷遺跡群は、杉谷古墳群に先立つ時代の墓地で方形周溝墓など20基が発見された。中でも杉谷A遺跡の木棺内部からガラス小玉、素環頭太刀、銅鏃などの副葬品などが出土した。これらの墳墓群は古墳時代出現期の地域社会を知る貴重な遺跡で、現在遊歩道も整備され散策する事が出来る。
古沢塚山古墳	古沢	県道富山小杉線のトンネル山頂部(標高、95m)に古沢塚山古墳がある。この古墳は、5世紀前半に造られた前方後円墳で、前方が長さ16m、くびれ部の幅11m(先端部22m)、後円が直径25m(前方部との高低差78cm)の大きさで向きが北西、南東面に面している。周囲に杉谷古墳群など多くの古墳があるが、富山県にある前方後円墳の東端と云われている。



杉谷古墳群の現地案内板



古沢塚山古墳周辺



No名称	場所	見どころ解説
古沢神社	古沢	「古沢神社」は、むかし高木の神社であったと伝えられている。およそ300年前、古沢村が誕生したころ、これより50年程前に土代村(小杉)が「下東野」を開墾し水田にしており、またこれより40年遅れる頃(鷹狩制の廃止(1693)後)、高木村(呉羽)が法尻山(ほじりやま)(神明社の裏手の山)を土代村から譲り請けて「上東野」を開墾していた。この辺りは、「ため池」だけでは水が不足するため、高木村が法尻山の中腹に「高木神社」を勧請し、水の確保を祈願するなどしていたが多くが畑のまま新田開発が進まなかった。その後、宝永元年(1704)富山町の古沢屋仁右衛門が荒地の「大割」と畑地「百石場所」「西野」「東野」「金草」を水田にするため山田川から水を引く事を富山藩に願った。宝永3年(1706)用水の開削工事が始まると、「高木神社」は「古沢用水」の工事の安全を守る守護神となり、「古沢用水ほじり宮」と呼ばれた。「古沢用水」が完成(1722)してから約50年後の安永2年(1773)、「法尻山」を高木村から譲り請け、そして約100年後の文政元年(1818)に、「高木神社」も古沢村のものとなった。(この間、神社の守り(棧敷料)として、毎年米5斗づつ高木村より古沢村が請け取っていた。)そして新しく本殿を現在地(旧社は左手の高い場所)で造り名実ともに、古沢村の「御高並用水守護神明宮」=「古沢神社」となった。これを祝って毎年、秋祭り(9月6日)に奉納相撲が始まった。この相撲は「法尻の相撲」と称し、花相撲・草相撲があり、地区はもちろん、遠く石川県の能登や氷見方面からの参加があったとされるが、昭和32年、古沢土改良区の発足をもって終了した。[祭神] 天照皇大神、豊受大神 [地名の由来] 「古沢」は、東野(1700年頃命名)が古い時代「古沢野」と呼ばれていたことによる。



古沢神社参道

No名称	場所	見どころ解説
古沢用水	古沢	古沢用水は、今から300年前に開削され、現在古沢・池多・老田・呉羽・(婦中町)古里・朝日地区の田畑260ha(以前は300ha)を灌漑している。江戸時代初期は、各地で新田開発が盛んに行われ、富山でも牛ヶ首用水が寛永元年(1624)に工事が始まり、寛永10年(1633)完成していた。富山藩の誕生(寛永16年(1639))後も、引き続き新田開発が行われ、さらに田畑の売買や財力のある商人による新田開発を認めていた。この古沢周辺では、富山藩の鷹の餌場(鳥取場)として利用されていた沢沼池が、元禄6年(1693)鷹狩制の廃止にともない開発の対象となった。ところが、開墾されたけれど、ため池だけでは水不足をきたし、新田にはならず、ほとんどが畑のままであった。そこで富山町の古沢屋仁右衛門は、宝永元年(1704)、古沢野の新聞と畑直(荒地と畑の水田化)、そして水不足解消のため山田川から水を引く用水を私財投じて作る事を富山藩へ願った。翌2年(1705)2月、藩主前田正甫から許可をもらい、その翌3年(1706)春から用水開削工事で古沢野の新聞工事に着手した。正徳5年(1715)用水は、約10年をかけて一応完成し、「仁右衛門用水」と呼ばれた。用水の完成は、2期に分けてなされ第一期が花水谷の新堤から取水して、各願寺近くの新聞下(婦中町)を通り、宮ノ下(古沢)までを完成し、暫定的に「花水谷用水」と呼ばれた。第二期は、山田川の焼野(婦中町外輪野)から取水し、新聞下(婦中町)で花水谷用水へつなぎ全長14kmを貫通した。工事では、高低の測量を夜間にロウソクの灯火を利用して行われ、山や谷の肌をほぼ等高線に沿って掘ったと伝えられる。なかでも一番の難所は、辺呂川の横断であった。木製の台の上に木製の樋を懸けて水を通したけれど、揺れのため台が不安定で、樋からの水漏れが激しく古沢へ水が届かなかった。また、距離の長い用水路は、土製(掘る盛る)で、しかも曲がりくねっているので、もろく崩れやすく修繕の費用が大変高かった。工事完成後、仁右衛門と村人たちは、築堤工事(台の固定)と以降の用水維持(修繕費ほか)を藩でみてほしいと願った。その結果、藩から派遣された藩士藤江久兵衛(婦中町新聞の藤記家)の監督のもと、高さ17m、長さ90mの土堤が享保5年から同7年(1722)までの3か年をかけて造られた。工事は、近くの山の切り崩した土を盛り、側面に長尺城跡の石垣の石を積み、のべ1万人かかった。この築堤を「築溜」と言い、現在地名として残っている。これらの工事をもって用水の完成とし、以降、藩に関わるため、「古沢用水」と命名された。仁右衛門のほか古沢用水に貢献した人は、牧野屋と四兵衛がいる。与四兵衛は、古沢屋仁右衛門(初代・二代)の補佐をした村建の草分けの人で、宝永年間(1704~1710)、小用水にあたる西野用水(与四兵衛用水とも呼ばれた)を私費で作り、また嘉永4年(1851)頃、山田川の大洪水による大災害を復旧した。さらに文久2年(1862)、用水定期掘替の際、藩からの支給がなく村の借入れとなったが、西野用水を私費で掘替えた。肝煎(村長)であった与四兵衛は、このように公私にわたり大変尽力したので「中興の祖」と呼ばれている。大正15年8月、古沢用水記念碑が神明社境内に建立された。その後昭和58年11月にも、この古沢用水を管理している古沢土地改良区が古沢やすらぎ苑に新しく碑を建立し仁右衛門と与四兵衛の偉業を讃え、後世に伝えている。



神明社前を流れる古沢用水